

3. 地域を活かした企画づくり

(1) 地域を新たな視点で眺めよう！～地域資源の再発見

農業・農村体験といえば、多くの人が田植え・稲刈り・野菜栽培などの農作業を思い浮かべるのではないのでしょうか？ 農作業は作物の生長に寄り添う、収穫の喜びを得るなど、農業・農村体験の核となる活動として位置づけられます。しかしながら、「土のあたたかさにふれる」「カエルの声を聞く」「農的な景観を目の当たりにする」など、子どもたちにとっては農作業の合間の出来事が農作業と同じぐらい印象深いことも少なくありません。場合によってはそれらの活動を前面に押し出した企画づくり（例：あぜ道でのお昼ごはん、ナイトハイクなど）が子どもたちの興味を高める上で効果が得られることがあります。

地域による活動の場合は、こうした様々な地域資源を一層、積極的に活用することが可能です。たとえば、早朝の体験や夜の体験だって、可能なのです。自らの地域を子どもたちの視点を意識して（自分の子供時代に印象深かった要素を思い出してみましょ）農業・農村体験というフィルター（視点）であらためて見つめ、歩いてみましょ。普段気にとめなかった、活動の資源や材料が意外とあちこちにあるはずですよ。

次に、農業・農村体験に係る地域の資源を掘り起こすヒントをいくつか示します。

◆地域資源の活用（その1）～自然と結びついた暮らしの発見

農暦とも呼ばれる旧暦の頃、地域の行事やお祭りは季節毎の農作業と密接に結びついていました。現在、地域に残る諸行事は、農業に端を発しているものが少なくありません。ナスやキュウリをお盆の迎え火に使う地域など、季節毎の地域の生活文化も農業・農村体験の活動資源となります。

◆地域資源の活用（その2）～ゆったりとした時間・古いときにふれる

「スローライフ」が流行語となり、ゆったりとした暮らしの価値観が高まる現在、自然の秩序に沿った農的な時間を体験することは、子どもたちにとって新鮮です。畦で昼ご飯を食べる、昼寝をするといった体験は、農業・農村体験版アウトドア活動と位置づけられます。また、いなごを採った、レンゲを摘んだ、田植えを手伝ったなど、地域の高齢者に昔の話を聞くことで、子どもたちが日中活動した場所と昔の風景がオーバーラップして感じられるのではないのでしょうか？ 早朝や夜の活動プログラムだってやりかた一つで、大変興味深いものが考えられるはずですよ。

◆地域資源の活用（その3）～農業・農村の持つ「間」にふれる

その2では、「時間」にふれましたが、ここでは「空間」に着目します。

現在、農家や廃校の再生プロジェクトに多くの地域が取り組んでいます。古い農家や廃校で過ごす時間は独特の味わいが伴います。室内に限らず、ゆるやかに曲がった土の道を歩いたり、火の見櫓のある農村の広場といった農村景観に、なつかしさややすらぎを感じる人も多いのではないのでしょうか。

このような農業・農村の持つ「空間」にふれることも農業・農村体験の素材となります。意図的・積極的に体験プログラムに取り入れる方法としては、スポットを見学するだけでなく、オリエンテーリングのポイントとして回る、畑・お寺のコンサートなどの工夫が考えられます。

活動プログラムをつくる際には、活動主体の「動」の要素と同時に、地域を感じる「静」の要素を組み合わせることが有効です。静の部分として、地域の空間の持つ魅力を活用してみてもはいかがでしょうか？

◆地域資源の活用（その4）～現在のイキイキとした地域活動にふれる

ここまでは農業・農村に係る自然・暮らし・時間・空間にふれてきましたが、ここでは、現在の農家・グループや農業関連組織が取り組んでいる活動を資源としてとりあげます。

大型農業機械や高度な施設を導入した農業、創意工夫が積み重ねられた有機栽培、近代化された流通施設や販売施設、一方で農家グループが取り組む加工・直売活動や農家レストランなど、現在、農業・農村をとりまく活動形態は様々な試みがなされています。子どもたちの農業・農村体験としても、このような生きた地域の活動が資源となります。見学や体験をとおして、地域の農業について考え、調査や企画づくりを行ったり、協力を得た地域の方々への報告会の開催といった、いわば「地域づくり」参画型の農業・農村体験も生まれています（近年、欧米の「サービスマーケティング」の考え方を取り入れ、子どもと大人が協働しながら、地域における資源・問題を発掘し、調査・企画・実践・評価するといった「地域づくり型」プロジェクト型学習が全国で試行されつつあります）。

(2) 子ども農業・農村体験における活動企画づくり

◆3つの活動内容を組み合わせて

農業・農村体験の活動内容は、場所・もの・ひとに着目した次の3つタイプに大別できます。地域毎の状況をふまえ、地域の様々な資源を活かし、活動主体の得意とする、関心のある内容を核に企画づくりを進めます。

一つは、場所に関する「フィールド型」。田んぼや畑での栽培活動はこれにあたります。もう一つは、ものに関する「ものづくり型」。味噌づくりやわらじづくり、郷土料理づくりなどが該当します。最後の一つは、農家に泊まって生活体験をしたり、農産物の販売や家畜の世話などが該当する「ふれあい交流型」。これらは、単独で行うというより、むしろ活動プログラムの中でうまく組み合わせることにより、それぞれの持ち味が活かされます。

◆企画づくりの基本となる4W1H

農業・農村体験においても他と同様、「いつ」「だれが（だれに）」「何を」「どこで」「どんな方法で」といった4W1Hを軸に企画づくりを進めます。

①「いつ」

活動の日時、活動時間、活動期間、頻度等

②「だれが（だれに）」

活動対象、活動主体（組織・個人・協力体制等）

③「何を」

活動内容

④「どこで」

活動フィールド、施設、地域内・外等

⑤「どんな方法で」

集団活動、グループ・個人活動、体験のみ、体験と表現、発表等

(3) 地域が取り組む農業・農村体験活動の主な形態

地域における組織・個人が活動主体として子どもたちを対象にした農業・農村体験活動に取り組む際、主に次のような活動形態が想定されます。

① イベント型

年間、2～3回程度実施する農業・農村体験活動を企画する方法です。農業・農村体験のねらいとなる農作物や家畜の成長に寄り添い「いのちにふれる」といった趣旨からは少々離れるものの、最初は無理をせず、取り組み易い活動からスタートするのがよいでしょう。たとえ回数が少なくとも企画の工夫によって、効果的な活動とすることも可能です。

〔例：JA兵庫六甲三田支部女性部による「夏休みファームステイ」等の取り組み〕

旧JA三田女性会（現JA兵庫六甲女性部三田支部）では、平成6年より地区内にあるニュータウンの子どもたち（小3～6年生）を対象に、女性会員自宅に1泊2日で受け入れ、自然探索や農業体験、農家宿泊体験活動を行っている。ニュータウンでは、1人っ子の家庭も多く、子どもどうしの交流が家族ぐるみの交流に発展したケースも少なくない。これまであまり農業やJAと関わりのなかった住民（非農家）に、JAやJA女性部に親しみを持ってもらい、女性部の活性化にもつながっている。

また、他方、同女性部では、地域内の小学校に農地を提供（貸与）し、農作物の栽培体験や収穫物の加工体験（こちらは年間を通じた活動）にもあわせて取り組んでいる。

② スクール型

年間を通じた農作物の成長や春夏秋冬における地域の自然・暮らしにふれる活動企画です。「農業小学校」と位置づけられる、子どもたちの農業・農村体験として望ましい活動形態ですが、活動主体の負担が大きくなることから、組織的な取り組みとしての位置づけ、地域間の連携といった周知な体制づくりが不可欠です。

〔例：JA北信州みゆきによる「あぐりスクール」の取り組み〕

JA北信州みゆきでは管内の子どもたち約100人を対象に、子どもたちが1年を通じ農作物の生長や自ら住んでいる地域にふれる、JA版農業小学校「あぐりスクール」を開催。毎週土（日）曜日、年間13～14回にわたる授業は、生活科・農業科・体育科の3部門から構成され、多くの職員が関わる中、職員側にとっても学びの場となっている。夏休みには、佐渡島に遠征する「海外研修」も企画され、「学校完全週5日制」が導入される中、地域で子どもたちを育てる活動となっている（事例編にて詳細を紹介）。

③テリバリー（出前授業）型

地域における活動主体が、提供可能である様々な活動メニューを用意し、地域における学校や児童館、子供会等から希望を募り、地域内に出向き活動支援を行います。あらかじめ地域資源を把握し、活動メニューの設定を行うなど、本格的な準備が必要です。

〔例：JA新ふくしまによる「JA学校教育支援事業」の取り組み〕

「総合的な学習の時間」を利用して農業体験に取り組む小学校を支援するため、JA新ふくしまでは平成14年度より「JA学校教育支援事業」を創設。「お米」「りんご」「もも」「なし」「野菜」の5つからなる基本コース、そば、ジャム、豆腐などの加工体験からなるオプションコースの2コースに活動内容を盛り込んだ。教育委員会を通じ管内48の小学校に農業体験の取り組みを呼びかけ、全支店（支所）をあげて受け入れを行っている。

なお、オプションコースでは、農業体験の他、同JAが運営するデイサービスセンターにおけるボランティア体験の受け入れも行っている。

④ファーム（農園）受入型

本タイプは、いわば「農業体験」と「農村体験」が一緒になった体験活動です。体験を受け入れる農園（生産空間＋生活空間）を設定し、活動体験と空間体験の両面から子どもたちの農業・農村体験を促します。また、地域内にある農業・農村体験の関連施設等をネットワーク化させ、地域を居住の場（生活空間）であるとともに、体験の場として位置づける「エコミュージアム」なども、本タイプの発展形として位置づけることができます。

〔例：ファームインさぎ山による田舎暮らし体験「かあちゃん塾」の取り組み〕

さいたま市の農家荻原知美さんは、首都圏の30km圏内の立地を活用、平成9年度より子どもを持つ家族30組を対象に、3月～12月の間、毎月1回（第二土曜日）に家族による田舎暮らし体験「かあちゃん塾」を開催。隣接する見沼田んぼ・水路を背景に、自然豊かな農園において、1家族10坪の畑を使った野菜づくりを基本に、遊び・伝統行事・環境問題などを織り込んだ活動を行っている。

不況で家業の植木の販売が落ち込み空いた畑の利活用を模索していたこと、子どもたちに田舎暮らしの体験を通じ人間にとって大切なことを伝えたいと考えていた矢先、ヨーロッパ視察への参加により本場の「グリーンツーリズム」にふれたことが取り組みの契機となった。

⑤地域間交流型

都市部の小学校による農業・農村体験を、農村にある地域が受け入れる、農村部の農業組織が都市部の小学校に出前授業に出かけるなど、異なる地域が連携・交流しながら、体験活動に取り組む方法です。都市部では一般に自然環境が乏しく、農業体験に取り組む際、周辺で農地を確保するのが困難です。一方、農村部では、都市部の立地が多い市場や大型スーパー等の消費施設、消費者の声にふれる機会が多くありません。本タイプは、異なる地域の連携が必要なことから、活動体制づくりが容易ではありませんが、地域の取り組みだけでは得られ難い幅広い活動内容が可能となります。

〔例：JAみやぎ仙南青年部と目黒区緑が丘小学校による農業・農村体験の取り組み〕

JAみやぎ仙南青年部では、以前、目黒区内の小学校にササニシキの苗を送り、プランターによる稲づくりの実演に東京に出向いたことを契機に、14年前から毎年、目黒区への米作りの出前授業を行っている。平成11年・12年からは、目黒区の教諭を対象とした「先生バージョン」、地元角田市農業振興公社との協賛による春・秋に2泊3日で目黒区緑が丘小学校の農業・農村体験を受け入れる「総合学習角田農業体験交流事業」をスタートさせた。また、同取り組みでは地元角田市の小学校子どもたちも活動に参加し、目黒区の子どもたちと子どもレベルでの交流も実現した。